釧路市立北中学校「学校だより」

北　魂

令和７年（2025年）９月１日発行　VOL 22

これからの時代の教師の姿

釧路市立北中学校長　冨　田　直　樹

２学期の１週目が「無事に」終わりました。「無事に」と記した理由は、夏季休業明けに深刻な事案が頻発するからです。２学期を迎えるに当たっての職員会議においても私から教職員に最初の１週間はいつも以上に生徒たちの様子を観察するよう伝えたところです。８月23日（土）の北海道新聞の第１社会面に「新学期SOS気付いて」という見出しの記事が掲載されていました。リード文には「自ら命を絶つ中高生が後を絶たない。厚生労働省などによると、2024年は全国で514人（中学生163人、高校生351人）が亡くなり、３年連続で過去最高を更新した。特に女子の増加が深刻で、この５年間で2.2倍の284人まで膨らんだ。交流サイト（SNS）を使う若者が増え、現実世界での人間関係が希薄化していることが一因とされる。心身の調子が崩れやすい夏休み明け前後に自殺者が増える傾向にあり、周囲がいかに子どもの孤立を防ぐかが問われている」と記されていました。

この１週間、教職員は生徒一人一人の様子を丁寧に観察してくれました。体調や気持ちの変調を申し出る生徒に対して時間をかけて話を聞いて寄り添ってくれました。教職員の観察で心配な様子が見られた生徒に対しては学級担任はもとより、学年主任の指示の下、複数体制で当該生徒の対応に当たってくれました。いつでも「生徒ファースト」で迅速に行動することができる本校の教職員に頭が下がります。そして、ここで忘れてはいけないことは、教師はこのことに並行して本業である「授業」を普通に行っているということです。夏季休業期間中はもとより、２学期が始まり毎日の放課後には黙々と翌日の授業の教材研究に励む教師たちの姿があります。

各都道府県教育委員会は、教師に求める力を明文化した「教員育成指標」をつくっています。授業づくりや学級経営はもちろん、「学校のビジョンづくりに貢献する力」、「多様な子どもを支援する力」など、期待される資質・能力がずらりと並んでいます。また、若手、中堅、ベテラン、管理職と、キャリア段階ごとに、求められることも積み上げられる形で増えていきます。「年齢に応じてレベルアップし続けなさい」と言われているようでプレッシャーに感じている教師もいると思います。一方、文部科学省では、2030年度から実施予定の次期学習指導要領の改訂に向けた議論を開始しています。ここでも、「個別最適な学びと協働的な学びの一体化」、「データ活用やAIリテラシーの育成」、「裁量的な時間の導入」など、新しい方向性が示され始めています。つまり、「教える」だけでなく、「支える」「一緒に探究する」「外とつながる」など、教師の役割がどんどん広がる傾向です。

教師という仕事は、教える知識や技能だけでなく、子ども一人一人に対する生徒理解を必要とし、人と人との多様なつながりを深めていく専門職です。その専門性を保障するためには、従来から学校に期待されてきた役割・慣習の見直しと、教師同士の連携・協働体制の構築が不可欠です。無限に広がる「期待リスト」に押し潰されることなく、チームで補い合える体制づくりが必要となります。そして、一人で完結するスーパーティーチャーではなく、学校全体で、地域と一緒に子どもたちを支えていく姿がこれからの時代の教師の姿になるのではないでしょうか。